

Laboratory Report

[限定公開!実験場 非公式レポート 第2号]

はじめに

限定公開!実験場 管理人あさぎりです。

「新説/珍説プチ上げまShow!」PDF版を手にとっていただき、ありがとうございます。

このファイルを転載などで入手なさった方のために簡単に説明しますと、私こと「あさぎり」が管理している「限定公開!実験場」というWebサイト(アドレスは、<http://www.synapse.ne.jp/mist-a/>)では、機動戦士ガンダムに関連するデータベースを扱っておりまして、そこで独自に展開している、いわゆる「俺説」が、本文内でも触れている「新説/珍説プチ上げまShow!」というコーナーです。

これを独立したPDF形態にしたものが、このファイルと言うことです。

「新説/珍説プチ上げまShow!」では、とにかく「他人に対して、何かしら訴える」ことを目標としています。(詳細は、次ページの枕を読んでください。)これを読まれて、何かしら感じるところがあれば、積極的にご意見下さい。

内容については、サイト内で展開しているいつも通りの「新説/珍説プチ上げまShow!」ですが、前回の「ジオンメーカー」編に続き、今回もPDFによる製作を行っています。PDF版の製作意図については前回同様のものですが、簡単に述べますと、「1.文章が長くなってきたためにWikiでの閲覧にそぐわない」、「2.一部内容の転載対策(下記注意参照)のため」、といった理由からこのような配布形態を取らせていただいています。

本来ならば、誰もが閲覧できるHTMLやWiki上での編集にとどめたいのですが、かつて「意図することと全く異なった内容」で転載され、受けなくてもいい批難を受けた苦い経験から「この手のオリジナル考察に対して」行っている制限です。ご理解をお願いしたいと思います。

なお、今回から、明確にシリーズ化と言うことにしましたので、それに合わせた構成に若干修正しています。また、既存の新説/珍説も環境が整い次第、順次PDF版として再リリースする予定です。

内容についてはいつも通りですので、スタートの文章もいつもと同じです(笑)

ご意見等がありましたら、サイト内雑談掲示板によるしくお願いします。

なお、今回の考察以外の考察一覧については、巻末に参考としてまとめてあります。

補足

Web(あるいはコンピュータ上)での閲覧と編集時の効率を考慮して、元ファイルはA4サイズで編集していますが、実際にはB5サイズでの印刷を想定しています。

PDFの印刷を行う場合、ターゲットをB5で行うといいでしょう。

また、画稿については、投入する予定は現時点ではありません。しかし、前回の完成版について、非常にありがたい反応をいただいていますので、最終的に仕上げたものを限定配布する可能性は否定しません。

注意

本サイトは、元々はオリジナルの作品公開のためのサイトでした。

(現在でもその残骸は残っています(^_^;))

公開する内容については、私だけではなく、来訪した皆さんの作品も公開するというサイトだったのです。しかしながら、無断転載や、直リンクなど妨害行為が続いたため、これらの公開を控えるようになっただけの話です。

今でも来訪した皆さんの作品も公開するという方針を変えるつもりはありませんし、自分のオリジナルを公開するという考え方も変わっていません。従って、転載防止とは謳っていますが、実際には申し出ていただければ、内容の転載については妨げるつもりは有りません。「私の論説の意図するところをきちんと伝えていただけるかどうか」だけが、転載に対する私の可否のスタンスです。実際、転載や直リンクを許可したサイトさんなどもありますので、勝手に意図しない形で転載し、苦情を受けたからって「クローズドサイト」だなんて言わないでくださいね>某サイトさん(^_^;

新説/珍説プチ上げまShow!

このコーナーは、ガンダム世界の資料や整合性などくそ食らえ!、とにかく奇抜な(なおかつ、ある程度の説得力を持った)新説/珍説をプチ上げるコーナーです(^ ^ ;
そのため、サイト内の他のコーナーと矛盾した記述も数多くあります。
故に、俺説度は他のコーナーの比ではありません(w
信じる/信じないはあなたの自由です!(笑)

本コーナーは、ご覧になった方の意見を取り入れ、よりいっそうのバージョンアップを行っていきます。説の本筋を変更しない(ここがポイント。説の本筋を変更した場合、他のサイトなどの意見と変わらなくなるでしょうから^ ^ ;)様な、補完意見は次々取り入れていきます。

PDF版追記:

今回の考察は、PDF公開であるため、脚注をページ下部分に切り出す方法をとっています。前回の考察では、その都度手作業で編集していましたが、今回は、一太郎の持つ機能で試しています。この脚注に関しては、未だ試行錯誤の段階ですので、しばらくは色々な形を試してみたいと思います。
また、各種用語については、サイト内コンテンツの「ガンダム用語の〔似非〕知識@Wiki」を参照していただくと、より詳細な記述が存在することもあると思います。これまでのような、Wikiの項目としての発表であれば、用語間で自動的にリンクが設定されるのですが、PDFファイルからはそうはいきませんので、出来る限り用語に関してはページ内でフォローする形を取ろうと考えています。(ページ内に、レイアウト枠を確保して触れている注釈が論説内の注釈、下部あるいは巻末の脚注があさぎりのフォローという形態を取ります。)無論、スペースの制限がありますので、Wikiほど突っ込んだ内容にはならないかと思いますが、その辺りはWikiをご覧になって下さいますようお願いいたします。

なお、次ページよりの本文は、一部砕けた論文調でまとめてあります。

また、主眼となる視点を遙か未来の宇宙世紀という観点(著者未定)で置いているため、他のガンダム世界の話題については触れていません。(ただし、脚注に関しては「あさぎり」のフォローという観点でまとめてあります。)

論説が読みにくい部分や明らかなミスなどがありましたら、サイト内雑談掲示板やWiki内の掲示板でご報告下さると助かります。

また、このファイルにはイラストなどは挿入されていませんが、ご協力いただければ挿入したいと思っております。こちらも掲示板で話題にいただければ、投稿方法などご連絡いたしますので、よろしく申し上げます。

Part.10 一年戦争後の地球連邦軍のMS開発を紐解く~1:ハイザック系MS~

Sec.1 : 序論

RMS-106ハイザック^[#1]は、一年戦争後に地球連邦軍が本格量産にこぎ着けた初のモビルスーツ~以下MSと省略する~である^[#2]。発見資料が少なかった当時^[#3]から、この説は述べられていることもあり、(大きな新発見でも無い限りは)揺るがないだろう。しかし、宇宙世紀を語る上で、問題となるのは発見された資料が、年代順に発見されているわけではない、という事なのである。

すなわち、現在ではハイザックという機体が、我々の知る歴史上初めて登場したのは、UC0085だと言われているが、新たな資料によっては、(ハイザックが一年戦争後に連邦が本格量産にこぎ着けた初のMSであるという事実は揺るがないにせよ)時系列が変更されることは十分あり得ると言うことである。

我々の知る歴史上初めて発見された宇宙世紀に関する資料は、ニュータイプ部隊と噂された第13独立部隊の記録フィルム^[#4]である。その後、この記録フィルムの編集フィルム(このフィルムは、おそらく軍広報の手による編集であろう、それ故に先の記録フィルムとは異なる部分が多々見受けられる)^[#5]が発見され、それに付随する形で、連邦軍、ジオン軍双方のMSの資料が立て続けに発見された^[#6]。これらの資料によって歴史上初めて登場したMSと、そのMSによる大がかりな宇宙戦争(現在では、一年戦争と呼称する)に伴う歴史的事実を我々は知ることが出来たのである。

その後、歴史研究が進むにつれて、新たにグリプス戦役時の資料^[#7]が発見されたのである。このグリプス戦役時代の資料も、様々な資料が存在しており、同じ組織の特定部隊を追従した記録でありながら、内容の異なる資料も発見^[#8]されており、これも時代々々の権力者などによる編集が加えられている可能性は非常に高いといえるだろう。

このグリプス戦役期における資料において、今回論説を述べているRMS-106ハイザックが歴史上初めて登場したのである。グリプス戦役の時代には、様々なMSが殆ど秩序無く登場しているため、この資料が発見された時期には資料の機体に対する考察も非常に曖昧なものが多かった。これは、確認できるMSの系譜が殆ど把握できない状態であったため、やむを得ないと言えはその通りである。しかし、それ以降今日に至るまで(いや、おそらくこれからも、であると思われるが)、次々と新たな資料が発見され、一見無秩序に登場したように見えるMS群も、その開発経緯などが明らかになってきているのである。

それゆえに、様々なMSの詳細なデータをこれら資料をつなぎ合わせて解き明かそうとする動きも、新たな資料が発見されるたびに活発になっていくのである。
(この序論の趣旨は、本論もあくまでそういった動きの一つであるに過ぎないということを述べてお

[#1]RMS-106 ハイザックの機体データの詳細に関しては、Wikiの該当項目を参照のこと。
次項で、簡単にスペックなどは触れるが、あくまでこれは論説の上での解釈である。

[#2]これについては、諸説あるため、あえて言うならば、「一年戦争後本格量産された初の(新規設計)MSである」としたほうがいいかもしれない。

[#3]ここでは、宇宙世紀のはるか未来からという視点で論じている。
機動戦士ガンダム放映当時の資料の多くで、ハイザックに関しては「戦後量産された初の(第2世代)MS」という記述を見ることができる。
現在では、第2世代MSというカテゴリの区分が変わってきている部分もあるが、これについては、本文中でも触れている。

[#4]これは、TV版機動戦士ガンダムを指している。従って、この歴史的事実は、変更されることはナイト言うことになる。(なお、ガンダム版パッケージのMSVキットのインストラクションの内容もここに含んでいる。)

[#5]これは、劇場版機動戦士ガンダムを指している。

[#6]ここは、MSV、MS-Xを示している。(ただし、ペズン計画の公開はUCの歴史上にでは、UC0085である。)

[#7]TV版機動戦士ガンダムを指す。

[#8]小説版、TV版、劇場版の相違を表している。

くということに過ぎない。)

RMS-106 ハイザック、あるいはそのバリエーションと思われる機体が関連する資料は、現在確認できる限り、次のようなものとなっている。^[#9] (基本的に資料の発見順に並んでいる)

- ・グリプス戦役時の資料
- ・第1次ネオジオン戦争時の資料^[#10]
- ・第2次ネオジオン戦争時の資料^[#11]
- ・グリプス戦役時におけるニューディサイズ動乱の資料^[#12]
- ・グリプス戦役直前のティターンズにおけるMS運用試験の記録^[#13]

また、以下に示された資料は、歴史家の間ではその信憑性を問われているものもあるが、この論説においては充分考慮するに値すると考え、取り上げたものである。

- ・グリプス戦役期における開発者の記述ノートやインタビュー記事^[#14]

これら資料に記載されたハイザックとその関連機体の情報をまとめていくことで、ハイザックという機体に対して解き明かしていこうというのが、本論説の趣旨である。

Sec.2：RMS-106 ハイザックとは？

RMS-106ハイザックは、一年戦争後に連邦軍が本格的に設計・量産した初のMSである。戦後のそれまでのMSはどちらかといえば改修機に近い機体が多く、基本的にはバージョンアップ機に過ぎないのである。これに対して、ハイザックは、(ベース機としてMS-06があるのではあるが)完全に新規設計された新設計機である。

また、ハイザックはいわゆる第2世代MSの初号機^[#15]でもあり、リニアシート、360度全周モニター等を最初に採用したMS^[#16]であり、その後のMSの標準型ともいえる。

[#9]模型雑誌等については、ここではとりいれていない。これは、とりあえず歴史考察的視点からまとめているためで、実際には模型誌のバリエーションも充分考察の対象となっている。

[#10]機動戦士ガンダム を指す。

[#11]機動戦士ガンダム～逆襲のシャア、を指す。

[#12]GUNDAM SENTINEL を指す。

[#13]ADVANCE OF ～ティターンズの旗の下に～を指す。

[#14]月刊 OUT に連載された藤田一己氏の World のこと。
連載に一部お遊び的な内容も含まれるため、このように分類したが、実際には非常に重要な記述が多い資料である。

[#15]これについては、実のところかなり曖昧な部分が多い。

ガンダム放映当時の資料とでは、ハイザックを第2世代の初号機とする資料が多いのであるが、現在ではガンダム Mk- をその位置に持つことが増えてきている。

これは、第2世代MSの区分が変わってきているためであり、この発端となったのは、0083である。

しかし、本説では、当初の設定に準じ、「リニアシートと全周モニターの採用」を前提とし、「(一部でも)ムーバブルフレームを採用した機体」を第2世代機と考えていく。実際、リックディアスなども現在では第2世代MSとしないという論調が大勢を占めているが、当時の資料からするとリックディアスもハイザックもジムも第2世代MSなのである。

筆者個人としては、第1.5世代というMBTなどで用いられる世代移行最中の表記ならばまだ納得できるのだが、「第2世代MSではないので、第1世代だ」という短絡的な表現方法は、どうしても受け入れられない。

本来ならば、細かくこういった内容については、詰めていくべきものではないかと考えているが、決定打がないことも確かであり、筆者としては巻末のコラムにこれは譲る。(場合によっては、新たな項目として検討する可能性もある、としておきたい。)

[#16]ここは注釈として、「最初に採用した量産型MS」としておく。

これは、ガンダム放映後に展開されたOVAで、ハイザック以前の機体でも全周モニターの採用機が登場しているためである。

ハイザックの設計の基本コンセプトはMS-06ザクに基づいている。その意味では、新型というよりはザクの改良型に近いともいえるのだが、その設計は先にも示したとおり完全に新規で行われており、既存の機体とは全く異なった物となっている。(例えば、足首部を見てもらえれば分かるだろう。ハイザックの足首はフレーム ^[#17]を採用しており、既存のMSの様に足裏にスラストを内蔵していないのである。)

ハイザックの開発が進められていた当時は、地球連邦軍もジオン系MSの技術を積極的に導入していた頃で、そのスタンスとしては「とにかくジオン系MSの技術を取り入れ、10年は遅れていると言われていた技術格差をなくす」といった点にポイントが置かれていたと考えられる。実際、この当時の連邦は、ジオン軍から接収したMSを使用して様々なデータトライアル ^[#18]を行っている。ここで得られたデータは後のMS開発に活かされており、ほぼすべてのジオン系MSのデータが連邦によって精査されたと考えて間違いはないだろう。

また、様々なジオン系MSに連邦製MSのデータをフィードバックする(あるいはその逆の)試みも数多くトライされており、UC0085頃にはそういった流れが一段落してきていたと考えられるのである。

こうして生産されたハイザックは、RMS-179/RGM-79Rジム と共に、連邦軍の各部隊に配備が進められ、UC0087年頃には数多くの機体が運用されるに至っている。

これは、ジオン残党狩りのために設立されたティターンズも例外ではなく、ティターンズが運用した機体は、皮肉にもかつてのMS-06と同じグリーン系で塗装 ^[#19]されていた。

だが、ハイザックは極めて初期に設計された第2世代MSであることから、設計に中途半端な面も多く、機体自体の成立過程からも「ザクの皮を被ったジム」と揶揄されることもあった。これは、連邦とジオンの技術融合を計ったが故に、双方が中途半端になってしまったことがその原因である。

さらにジェネレータの問題があり、複数のビーム兵器を一度にドライブできないという欠点を抱えていた。これは、一年戦争後に改良が進んだジム系にも劣る点 ^[#20]であり、これもハイザックという機体の評価をおとしめている要因の一つだろう。

しかし、戦後初のジオン系・連邦系の技術融合機としては、非常にまとまった機体であり、操縦性とメンテナンス性の高さなど、見るべき長所が多いのも事実である。

ハイザックは、グリプス戦役時代全般を通じて連邦、ティターンズなどで用いられた。また、ジオン共和国やアクシズ軍(ネオジオン軍)での使用も確認されており、比較的長い期間運用された機体であることは間違いない。

しかしながら、グリプス戦役後半におけるMSの加速度的進化から、前線で積極的に戦闘を行う機体としては運用しにくくなっており、徐々に姿を消していくこととなった。特にティターンズでは、積極的に新型MSを採用していた関係もあり、その殆どの機体がジオン共和国に供与され、運用されることになっている。(推察であるが、このジオン共和国供与機が、後の第1次ネオジオン戦争時に確認されたネオジオン軍の機体ではないだろうか。)

こうして一線を退いた機体は、民間へと払い下げられ民間作業機として用いられたり、MSレースな

[#17]先述した第2世代MSと若干の関係があるのだが、ここで筆者はハイザックの脚部に簡易ムーバブルフレームが使用されているということを示したく、この表記となっている。

[#18]この当時、連邦軍はジオン軍が用いていた機体の多くを実際に運用し、データを収集している。また、一年戦争で失われた機体を補充するという意味もあったとされる。運用されていた機体で確認できるものは、以下の通り。

MS-06F,F2,E,J,M,V,MS-07H,MS-09,MS-11,MS-14A,F

[#19]これは、一部資料のみに確認できるが、ガンダムがスペースノイドにとって後に忌避の対象となるように、ザクはジオン残党にとって戦力の象徴の一つだった。

この機体にそっくりなハイザックによる弾圧は、ある意味象徴であったザクに裏切られたようなものであり、ショックを受けた者も多かっただろう。

[#20]実際、RGM-79Cではビームサーベルとビームライフルの同時ドライブは可能である。

遡ると、実はRGM-79でも可能であるのだ。(すなわち、ハイザックはビーム兵器の面では、RGM-79にすら追いついていないということになる。)

つまり、ハイザックはジェネレータ出力の問題でビーム兵器の同時使用が出来ないのではなく、ジェネレータのバイアス関連の問題で、ビーム兵器の同時ドライブが不可能であるのだろう。

どに運用される ^[#21] ことが多くなった。

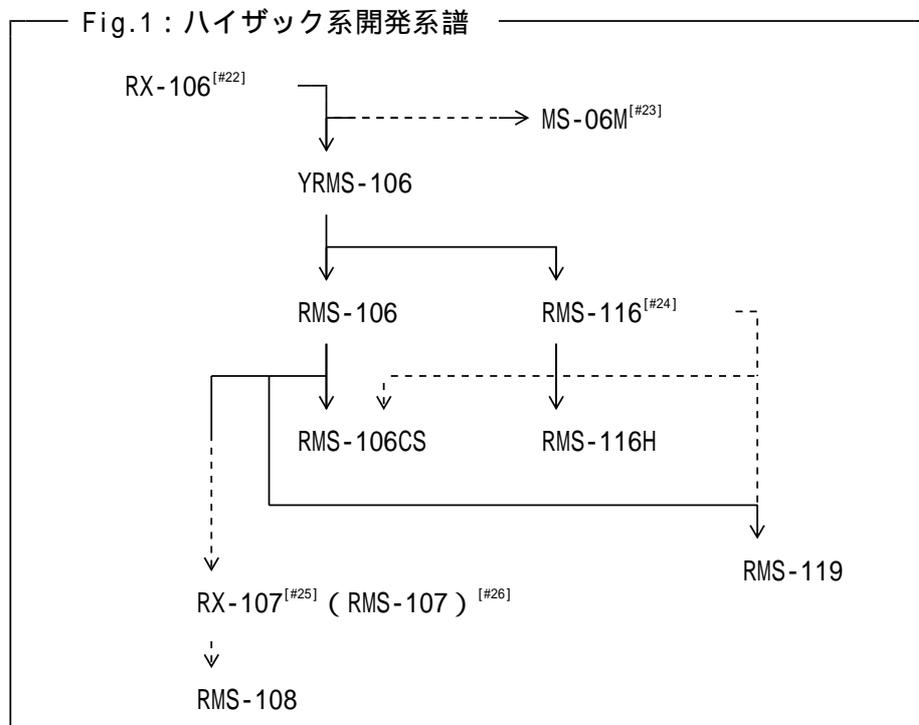
総じて言えば、ハイザックという機体は過渡期の1機体に過ぎないが、その存在は必然であったといえよう。それだけに歴史上では（性能的にはそれほど見るべき点はないが）重要な位置を占めている機体と言えるだろう。

Sec.3：ハイザックの開発経緯

ハイザックそのものは、MS-06をそのコンセプトベースに持つことが、実際の設計は新規であることは先に触れた。しかし、その開発の経緯については、未だ持って資料が乏しいこともあり、意外と知られていないのが実情ではないだろうか。

特にその開発元については、諸説あることで有名であり、未だ持って明らかではない。しかし、大別すると「連邦開発説」と「アナハイム開発説」の2説に集約することは可能である。

それではまず、確認できるハイザック系の機体をまとめてみよう。（民間機については原則として除外するが、ネオジオン戦争時にネオジオン軍が使用したRMS-116Hは、例外的に取り扱う。また、一部バリエーションは、論説内で提示するため、ここには掲載していない。）



上図は、基本的にハイザック系とそれに連なると想定される機体を表記しただけであり、実際には

[#21] 逆襲のシャアにおけるホビーハイザックがその最たる例だが、他にもアステロイドビートなど払い下げMSを用いた描写がなされた作品は数多く存在する。

[#22] 版MSVのMS-06Mパッケージに記述が見られる機体。

[#23] 版MSVの水中型ザクを表す。

[#24] この機体は、正史には登場しない。RMS-116Hを肯定するために暫定的に表したものである。

[#25] ADVANCE OF におけるRX-107ダンディライアンのコアモジュール「ロゼット」のこと。

[#26] 近藤和久氏がB-CLUBで発表したオリジナル機体。

これ以外のMSなどからのフィードバックも存在する。(また、当然ながらここに記載された機体がハイザックのすべてのバリエーションではない。) そのことを了承した上で、以下に連なるそれぞれの機体の論説を考慮して欲しい。

なお、図においてハイザック系の系譜としてRX-106なる機体を提示した。この機体は、極めて限られた資料^[#27]にのみ確認できる機体ではあるが、当時のMS開発の流れにおいて非常に重要な機体であるため、マイナーではあるが、特に注力してとりあげたい。

1. RX-106 プロトタイプハイザック

RX-106俗にプロトタイプハイザックなどと呼ばれる機体は、連邦軍のグラナダ工廠における6番目の開発機^[#28]として登録がなされている機体である。この機体は、連邦軍が戦後初めて開発した新型MSとして設計が進められていた。しかし、その実態は「ジオン製MSの技術導入検証機」といったニュアンスの強い機体であったことは間違いないだろう。

一年戦争後、グラナダの旧ジオニック社工場などはジオニック社解体に伴い、アナハイム・エレクトロニクスに吸収されることとなった。また、グラナダ近郊のジオン軍の基地は、連邦軍によって接收され、連邦軍の基地として機能することになった。これは、グラナダにはジオニック社やジオン軍の大規模なMS開発施設がそのまま残されていたこともあり、積極的にジオン系技術を吸収しようとしていた連邦軍にとっては都合がよかったのである。そのため、グラナダ工廠における開発機は、必然的にジオン系MSの意匠が強く表れる機体となっている

残念ながらRX-106に関する資料には、「RMS-106の原型となった機体である」という点と「そのジェネレータがMS-06Mに用いられた」という2点のみしか確認できないのだが、グラナダ工廠における開発機という点からも、よりジオン系MSの意匠の強い機体であったのではないかと想定できる。

この機体の詳細については先に示したとおり不明なのだが、機体について推察するために都合のいい資料はいくつか存在している。その一つが、ニューディサイズ動乱の際に月面都市エアーズ市の市民軍が使用したハイザック^[#29]である。この機体は、ボディパーツこそハイザックなのだが、腕部がMS-06系であり、脚部パーツもハイザックの特徴的な脛横のスラスタパーツ

が存在していないのである。この機体をどのように考えるかについては、ハイザックがMS-06のパーツを流用した機と考えるのが最も妥当だとは思われるのだが、考え方を変わるとハイザックという機体は、ジオン系MSのパーツによっても充分運用可能な程、基礎設計はジオン寄りにあるということが言えるのではないだろうか。

実際、これを示すかのような機体が存在している。RMS-006ローザック^[#30]という機体がある。この機体は、ハイザックの試作機として制作されたといわれている機体だが、その型式番号があり得ない番号である(当時上一桁が「0」という型式番号はあり得ない、それ故にエウゴは、リックディアスのダミーに使用したのである)。このことから、この機体自体は後に製作されたダミーである可能性が高いのだが、機体の外観は、先に示したエアーズ市の市民軍の機体に酷似しているのである。(リアスカートなど細部は異なっている。)

このように考えると、RX-106という機体は、次に取り上げるYRMS-106と比較して、よりジオン系MSのパーツ形状であった機体と考えると無難ではないだろうか。

さて、ここでもう一つ考えておきたい事がある。すなわち、このRX-106の開発はどこが行ったのか、という点である。

ハイザックの開発については、連邦軍説とアナハイム・エレクトロニクス説があることは既に述べた。しかし、YRMS-106はアナハイム・エレクトロニクスが開発した機体であることは資料から明らかになっているのである。ここでアナハイム説が正しいと論じるのは簡単だが、多くの資料で連邦開発説も確認できることから、無下に連邦説を間違いであると断じるのは論説を展開する上では少々もったいないと言えるだ

[#27] ガンダム版 MSV の水中型ザク (マリンハイザック) だけに記載が確認される。

[#28] 実際には、6番目というよりもあえてMS-06に引っかけて6に登録したといったニュアンスの方が強いだろう。

[#29] この機体は、ハイザックとは明言されていない点に注意が必要である。殆どのパーツがハイザックに準ずるため、便宜上ハイザックと呼称しているに過ぎないのである。ちなみに、資料はGUNDAM SENTINEL 別冊において確認できるカトキハジメ氏のイラストである。

[#30] モデルグラフィックス誌のオリジナル作例。制作は、みすまる ましい氏。

ろう。

そこで、このRX-106こそが連邦の開発による機体であると考えてみてはどうだろうか。つまり、連邦軍がRX-106という機体の設計開発を行い、このRX-106を元に量産に適した機体として再設計が施されたのがYRMS-106という機体であると考えるのである。

このように考えると、連邦説・アナハイム説双方を肯定することが可能となる。また、ハイザックという機体の量産過程におけるユニット構造の変遷も比較的うまく説明することができると思われるのだ。

さらに、グラナダという地域で開発されたということは、他にも論説的に有効な事実が存在する。すなわち、俗にMS-X（あるいはベズン計画）と呼ばれるジオン軍の極秘MS開発計画がそれである。

このベズン計画において、MS-10、MS-11、MS-12、MS-13、MS-17^[#31]という機体群が開発されていたことは早くから知られていた。このうちMS-17はその改良型がRMS-117という形で実戦に投入されている。また、グリプス戦役時には、MS-11が北米において実際に使用されていることが確認されている。これらの機体群は、一年戦争時には戦線に投入されていない、というのがこれまでの通説だった。しかし、近年発見された資料^[#32]によれば、グラナダ宙域においてグラナダ基地所属機としてMS-11が実戦に投入されているのである。

MS-11は、機体名をアクトザクといい、MS-06の性能向上機として開発が進められていた機体である。この機体は、ジオン軍が推進したベズン計画において最も大量生産に向けた機体としてプランニングされていたと思われる節が多々見受けられる。これは、戦争末期のジオン軍の窮状からすれば最も考慮しやすいことであり、実際、MS-09系の発展機としてのMS-10と共に、既存の生産ラインを流用した「生産しやすい」性能向上機であったことは間違いないだろう。これは、兵器の運用思想としてのハイ&ロー思想^[#33]にも適合する。当時最高級機であったMS-14の後継機として開発が進められていたMS-17に対して、MS-10、MS-11、MS-13は、既存のMSの（既に構築された）生産ラインを転用した機体と考えられ、その点でも低コスト性能向上機というのは間違いないと思われるからである。

このMS-11は、フィールドモーターが部分的に導入された革新的な機体であったとも言われ、当時主流だった流体パルスモーター方式から一歩進んだ連邦系フィールドモーター技術とのハイブリッド機としてプランニングされていたと充分考えられるのである^[#34]。また、このように考えると、MS-11が持っているポテンシャルは、連邦軍の持つ機体技術と充分符合することも言えるだろう。従って、このMS-11をベースとした機体がとして開発を進めた場合、既存のジオン系MSをベースにするよりもはるかに設計がたやすかったのではないと思われるのである。

[#31]MS-10 ドワッジ（現在では、ベズン・ドワッジと呼称することが多い）、MS-11 アクトザク（本文参照）、MS-12 ギガン（簡易MSとして建造された砲台型MS）、MS-13 ガッシャ（MSM-07系の発展機としてプランニングされた機体）、MS-17 ガルバルディ（MS-14とMS-15の総合発展型としてプランニングされた機体）、の5機種がベズン計画開発機である。

なお、ベズン計画ではこれらの機体や既存の機体に対するサポートユニットも開発対象であった。

[補足]

ベズン計画の機体は、当初から開発が進められており、実際にストーリーに登場する予定だった（＝実機は完成していた）のであるが、MS-X自体が中止となってしまったため、「実機は完成していない」というニュアンスの表記に置き換えられてしまったのである。そういった意味では、～宇宙、閃光の果てに...～にて登場したというはある意味必然ではあるのだ。

[#32]機動戦士ガンダム外伝～宇宙、閃光の果てに...～のことを指している。

[#33]ハイ&ローとは、高額な高性能機を中核に置き、この機体のフォローに比較的低価格な機体（低性能な機体、というよりも凡庸な性能の機体ととってほしい）を配置し、部隊構成を行うという考え方。

もちろん、この部隊構成というのは軍全体を見てのことであり、一つの部隊内ということではない。（そのような事をしてしまうと、部隊全体のスペックが低い方に合わさってしまい、無意味である。）

元々は、米海軍がハイスペックの極みとして開発したF-14のあまりの高価格にF-18（F/A-18）を追加採用したことが発端。同様の事態は、空軍のF-15とF-16にもいえる。

[#34]これについては、前回のMSメーカー編を参照してもらいたい。

この考え方は、あながち間違っていないと筆者は考えている。

[補足]マスターグレード「ギャン」のインストラクションでは、「フィールドモーター」という言葉は使用されていないのだが、「流体パルスアクセラレータ」という言葉に置き換えられている。この機構の特性としては、後付けの流体パルスモーターの高機能化機構、といったニュアンスで受け取れるが、簡易型フィールドモーターでも問題が無いと思われるような記述なのである。逆に言えば、これをフルスケールで導入したのは、MS-17ともとれるのである。

実は、RMS-106は、MS-11の発展機であるといった記述をおこなっている資料も存在するのである。このことから考えても、実際に実機が運用され、そのデータが存在していたグラナダでRX-106が開発されたのは、ある種の必然と言えるだろう。極論すれば、パーツを連邦が建造したMS-11こそがRX-106である可能性^[#35]も否定はできないのである。

2. YRMS-106 先行量産型ハイザック

YRMS-106ハイザック（先行量産型）は、当初一部技術者のインタビュー記事^[#36]においてその存在が明らかとなった機体である。その出仕故、当初は存在が疑われていた機体でもあった。特にその型式番号が、当時の連邦軍の型式番号として非常に珍しいタイプであったため、それも存在に懐疑性を持たせるきっかけとなったことは間違いないと思われる。

ところが近年発見され、現在もその整理作業が進んでいるティターンズのMSテスト部隊の記録文書^[#37]にもこの機体が見受けられ、実際に運用試験が行われていることが確認されているのである。この記録文書には、さらにRX-107というRMS-108に連なる系譜と思われる機体も存在しており、ハイザック系のMS群を考察するにかなり重要な資料であることは間違いないだろう。（それ故に、その資料整理が迅速に、且つ、精度の高いものであることを期待したい。）

ここで手元に資料がある方は、このYRMS-106の機体構成を見て欲しい。

YRMS-106は、基本構造こそRMS-106と大差ないが、そのパーツ構成を見ていくと、RMS-106とは細部で異なる部分が存在することが分かるだろう。そして、その差違が主に脚部に集中していることも分かるのである。

まず、最大の特徴が脚部スラストユニットにつながる動力パイプである。これはRMS-106には存在しないパーツなのである。また、大腿部がRMS-106とは異なり、どちらかと言えばRMS-106CSやRMS-116Hに近い形状であることが分かるだろ

これについては、新たな資料の発掘を待つしかないが、いずれにせよ、RX-106は、YRMS-106のあくまで雛型であり、機体レイアウトを含め実際に建造されたYRMS-106とは大きく異なった機体である可能性が高いということは言えるだろう。

このことは、YRMS-106という機体自体が未だ整理途中であったということと、RMS-106ではなく、このYRMS-106の系譜と思われる機体も存在しているという事実を指し示しているといえるだろう。

さて、ここで先に挙げた脚部の動力パイプについてももう少し考えてみたいと思う。

「動力パイプ」とは、ジオン軍のMSが備えている「流体パルスモーターシステム」による駆動システムを成立させるために必要な装備の一つである。この動力パイプがYRMS-106では脚部に存在し、RMS-106では撤廃されている。この事が何を表すか、という事なのである。

すべてのMSの祖とも言われるMS-05ザクでは、この動力パイプは内装されていたが、出力向上に伴ってMS-06ザクでは外装式に改められている。MS-09やMS-14といった重MSでは、動力パイプの内装は可能だったであろうが、MS-06の発展型であるMS-11では、やはり動力パイプは外装式なのである。ただし、MS-11では、フィールドモーターシステムを搭載していると思われる脚部は、動力パイプは存在しないのである。このことから考えると、YRMS-106で動力パイプが脚部に存在している理由は何だろうか？

同様に、MS-06やMS-11では、腕部の動力パイプの内装に成功している。しかし、YRMS-106やRMS-106では、腕部の動力パイプも露出しているのである。

これらは、実は連邦系MSとジオン系MSのハイ

[#35]実のところ、似たような可能性は他にもいくつか散見できる。

例えば、EMS-10 ツダの実用試験であるが、これも外装が一部変更になっただけで、実際にはEMS-04 そのものであった可能性も指摘されている。

また、YMS-14とYMS-15のコンペティションに関しても、実際にはMS-11（ゲルググ試作型）とMS-X10という機体で行われたという説もあり、MS-11は実際にはMS-06R-3が使用されたとも言われているのである。（前回の論説では、MS-X10という機体も、実はEMS-10である可能性も指摘している。）

[補足]

マスターグレードギャンのインストラクションにおいて、ギャンの旧型式がMS-X10であるということが明確化された。

[#36]繰り返しになるが、月刊OUT誌1985/08に掲載されたWorldが初出となる。

[#37]繰り返しになるが、AOZのこと。

ブリッド化に起因するのではないかと筆者は想定している。連邦系MSのフィールドモーターシステムをジオン系MSへ導入するに伴い、これら双方のシステムを投入したが故に、間接各部のモーターシステムが中途半端なものとなり、動力パイプが露出しているのではないかとと思われるのである。

例えば、YRMS-106では、膝関節部と足首関節部が脚部の主な間接部であるが、膝関節部はその形状からして、後のムーバブルフレームにつながる連邦系技術で構成されていると思われる。しかし、足首の関節部は（MS-11でまがりなりにもフィールドモーターシステムが実用化されているにも拘わらず）どちらかと言えばジオン系MSの間接構造に近いのである。これを駆動させるために動力パイプが必要であったのではないだろうか？

また、RMS-106の膝関節部は、動力パイプが内蔵された ^[#38]形となっているが、YRMS-106の関節構造は、どちらかと言えば連邦系の関節がそのままといった形状なのである。

これらから考えると、アナハイム・エレクトロニクスがRX-106をより量産に適した形で再設計したものがYRMS-106であると考えるのが適当であろう。機体自体は、連邦が設計したRX-106

をベースに、様々なアナハイム・エレクトロニクスが持つ技術投入が行われ、機体の整理が行われた機体、これこそがYRMS-106ではないかと思えるのである。

むしろ、アナハイムによる整理が行われたということは、アナハイムの生産しやすい形へまとめられた機体であるということでもあり、この時点で、ハイザックの納入がアナハイム中心に行われるであろう事は、容易に想像がつく ^[#39]だろう。

しかし、アナハイムだけが量産を一手に引き受けられるほど、当時の連邦とアナハイムの力関係が緊密であるわけでもなく、その点から言えば、実はエウゴによるティターンズ打倒が、アナハイムと連邦の蜜月を生んだといっても過言ではないだろう。

話が脱線したので修正するが、アナハイムだけで量産を引き受けられるような政治情勢では当時はなかったことは明らかであり、このYRMS-106をさらに量産しやすい構成にまとめなおし、連邦系施設などでもそこでパーツを調達しやすい形で柔軟な構成としたのが通常我々が見ることのできるRMS-106ハイザックであると考えてみるといいだろうか。

3. RMS-106 ハイザック

アナハイム・エレクトロニクスによって生産型へとまとめられたYRMS-106のデータは、各生産工場に送られ、このデータをベースに速いペースで生産が行われた。この際、ジム系の生産設備が有効に活かされるように若干の設計変更が行われている。この設計変更後の機体が、いわゆるRMS-106ハイザックである。

YRMS-106との大きな差異は、脚部動力パイプとスラストユニットといった点であり、これは脚部ユニットをより洗練した機体であると考えられる。

この機体は、連邦系の様々な工場で生産が行われ地球上の連邦軍やティターンズなどに配備されることとなった。設計時点から既にジオン

系MSの設計と連邦系MSの設計の相の子といった設計であったRMS-106は、当初から中途半端な設計が目立ち、「ザクの皮をかぶったジム」などと揶揄されることは多かった。だが、その良好な操縦系とジオン系MSのパーツであっても連邦系MSのパーツであっても若干の調整によって使用できるというメンテナンス性と稼働性の良好さ（それ故に、この機体は、様々なパーツを流用した形状違いの機体が数多く存在することとなった ^[#40]）から、実は思ったほど評価は低くはないのである。これは、大量に機体運用を行うことを前提とした連邦軍のMS運用思想からすれば至極まっとうな評価であり、かつての一年戦争のような大規模宇宙戦争が勃発した場合、RMS-106の様な（付け加えればRMS-179もだが）比較的低コ

[#38] プラモデルなどを見てもらうと判るが、動力パイプが間接ユニットに巻き付いたような形状となっているのである。

[#39] 筆者の個人的感想であるが、既に納入が始まろうとしていたハイザックをわざわざ T3 でテストしたということは、ティターンズに対するアナハイムの根回しは、かなり早い時期から行われていたということになる。実際、ティターンズが成立してから 30 パンチ事件が起こるまでのおよそ 1 年半の間にハイザックがテストされていることを考えると、ティターンズはアナハイムに対して（デラズ動乱の件もあり）注意を払っていたことと、逆にアナハイムはティターンズに取り入ることで連邦内部に食い込もうとしていたことが想像できる。

[#40] ここでは、明確に文字として表していないが、センチネルに登場したバージョンや、HGUC の様な動力パイプのアレンジすらパーツ互換と、機体設計の柔軟さでクリアすることが可能ではないかと意図している。

スト且つ安定したスペックの機体は、非常に有効に機能するだろうと想定されていたのである。

しかし、RMS-106にとって不幸だったのが、グリプス戦役期における戦闘が「当初想定していたような大規模戦闘ではなくなってしまった」という点である。もちろんグリプスを巡る決戦は、アクシズまで含めた三つどもえの戦闘となっており、こういった機体が働く場面は多々あったのだが、既にその頃には戦闘のパターンが量産MSによる力の均衡を崩すといった戦いから、1機（あるいは数機）の強力なMSによる戦線突破型の戦闘に移ってしまっていた。無論、量産型MSが戦線を支えていたことは間違いないのだが、一年戦争時代ほど量産MSにかかる比重が少なくなっていたというのが真相ではないだろうか。

これを示すのが、実は第1次ネオジオン戦争である。第1次ネオジオン戦争では、アクシズ（後にネオジオンに改称）といういわば小規模戦力に地球連邦は、いいように蹂躪されている。このアクシズ側の部隊運用を見ると、司令官（あるいはそれに類する立場にある者）が駆る強力なMSが、戦場を支配することが多々あったのである。

これは、アクシズ側が連邦側の抱える諸問題を出て活動した点が最も大きな要因ではある。だが、もう一つの大きな要因として、グリプス戦役後半から既に始まっていた「MSの奇形化（非常に高出力化した機体や、高機能化した機体など、恐竜的進化が始まっていた）」が、あげられるのである。

このハイスペック（そしてハイコスト）機によるいわば一対一の戦いが、戦場を左右する要因となっており、各軍もこれらのハイスペック機を中心に戦場における部隊編成を行うような状態になっていたのである。こういったハイスペック機を中心とした限定編成の戦場において、一般的な量産型MSの出る幕はほとんど無いに等しいといってもいいだろう。

逆に言えば、RMS-106のような標準的な汎用MSは、既に前線においては力不足となっていたのである。この事実は、一年戦争時の状況であったならば、十分な評価を得られるであっただろ

う機体でも不当に低い評価を受けることも多々あったということを示している。

ここで、このグリプス戦役時の各勢力の量産型MSをあげてみると次のようになる。

ティターンズ

- ・RMS-179ジム
- ・RMS-106ハイザック
- ・RMS-108マラサイ
- ・RMS-154バーザム

エウーゴ

- ・RGM-79Rジム ^[#41]
- ・MSA-003ネモ
- ・MSA-099リックディアス

連邦軍

- ・RGM-79Rジム
- ・RMS-106ハイザック

アクシズ

- ・AMX-003ガザC^[#42]

これらの機体を見ると、リックディアスを除いて低い評価が目立つ機体が多いことが分かるだろう。そのリックディアスですら、エース用量産機といったスタンスの機体であり、ここに提示するのをはばかれるかも知れない機体なのである。^[#43]

そう考えると、グリプス戦役期における量産型MSというのは、低い評価しか目立たない機体ばかりだということになってしまうのである。これはどう考えてもおかしいだろう。実際、いずれの機体も一年戦争時のMSと比較して、遙かに上を行き、なおかつ安定したスペックをもっている気体ばかりなのである。

通常、安定した運用が求められる量産型MSにおいて、スペック面などで制限があるのは当たり前である。そのスペック不足の部分が指摘されるならばまだしも、全体的な機体ポジションまで含めて低い評価がなされるというのは、どう考えてもおかしいのである。

もちろん、これらには現時点で評価の定まっていない機体も存在するが、いずれの機体もおそらくRMS-106と似たような評価が下されるので

[#41]このRGM-79Rは、意識して使用している。

AOZのコミックで、改修型のジムと新規設計型のジムにはスペックに差があるというニュアンスの描写があったためである。

[#42]本文の趣旨とは異なるのだが、元々ガザCに関しては廉価版TMSという位置づけであり、当初から数あわせの機体として設計・開発されたと設定されている。

それ故に、低い評価であってもやむを得ない部分はある。

[#43]アッシマー、ハンブラビなどといった機体も量産されていたという記述が存在する。特にアッシマーについては、劇中でその姿が確認されているため、本来ならば含めた方がいいと思われるが、どう考えても「大量生産機」とは言いがたいため、ここでは省略している。

はないだろうか。

いずれにせよ、この時代（いや、これ以降の時代といったほうがいいだろう）は量産型MSにとっては、ある意味不遇な時代であったと言えるだろう。これ以降、いわゆる大規模戦争レベルの戦いというのは、一年戦争以降では、ザンスカール戦争と木星帝国戦争などしか無いのである。しかも、後者は大規模な戦いにはなったが、実質的には木星帝国軍の主力MAに対する攻撃を連邦軍の主力部隊（及び、公式記録では抹

消されているが、海賊組織のMS）が撃破することが戦いの中心であり、それ以外の量産型MSは、散発的な小競り合いレベルの戦闘を繰り返していたに過ぎないため、一年戦争レベルの大規模戦闘は殆ど起こっていないといっても過言ではないのである。

そういった意味では、RMS-106は、非常にコンセプト的には重要でありながら、タイミングの悪すぎる時期に登場した機体だったといえるだろう。

4.RMS-116/ハイザック

RMS-116という機体は、歴史上その存在は確認できない機体である。

しかし、RMS-116Hという型式コードの機体が、第2次ネオジオン戦争時に確認されていることから、ベースとなった機体は存在していたと考えられる。^[#44]

その最大の理由なのだが、「RMS-116Hという軍の型式コード」である。通常、払い下げされた機体には、機体登録コード（この場合、通常1台1台別々のものが与えられる）が付与されるはずであり、軍の型式コードで呼ばれることはまずあり得ない。こういった場合に、軍の型式コードで呼ぶのは、（払い下げされた）機体全体をまとめた通称としての場合などであり、そう考えると「RMS-116Hという機種」が存在していたと考えた方が最も妥当であると思われるのである。（ただし、末尾の枝番に関しては、ホビー用払い下げを意味する可能性があるため、ここでは暫定的に「RMS-116という機種」を想定して論説を進めていく。）

第2次ネオジオン戦争時に確認されたハイザックが、どの程度原型機から改修されていたかを示す資料は現時点では確認されていない。しかし、この機体を見ていくとおもしろいことに気がつくだろう。

つまり、この機体のパーツ構成を見ていくと、RMS-106よりもYRMS-106に近い機体であることが分かるだろう。特にRMS-106で整理されたはずの脚部の動力パイプが存在する点が、大きなポイントとなるのである。

ショルダーアーマーなどは、同じ型式の機体であっても、パーツ変更によって取り替えることは可能である。しかし、動力パイプは、機体の稼働方式に直結するパーツの一つであり、そう簡単に変更を行うものとは考えにくいのであ

る。ここで「11」という拠点番号を持つ生産工場はどこかということ、これはルナ^[#45]を表しているのである。

ルナ というと、一年戦争当時から連邦のMS生産においては重要な役割を担った施設である。そのため、MSの生産設備は充実していたであろう事は容易に想像することが出来る。逆に言えば、その生産に向いているのは、連邦系MSの生産設備であるということも想像が付くであろう。そのため、かつてのRGM-79の製造ラインは充実しているが、ジオン系MSの製造ラインというのは、それほど充実していなかったのではないかと考えられるのである。

ここで一つの疑問を思い浮かぶ方もいるだろう。ルナ 工場で生産された機体で、最も有名な機体は、RMS-117ガルバルディ である。この機体は、いうまでもなく、旧ジオン軍のMS-17を量産ラインに乗せた機体であり、このジオン系MSがルナ 工場において量産されているのに、先のようなジオン系MSの製造ラインが充実していないという提示に対して、疑問を持つことはもっともなことである。

ところがこのRMS-117は、少々見方を変えると「ルナ だからこそ量産が可能だった機体」ともいえるのである。元々MS-17は、ジオン製量産MSの集大成として、MS-14の発展型としてプランニングされた機体である。だが、その実態は、MS-15とMS-14の相の子的な機体であることは既によく知られているのである。

ここで、ちょっと考えてみて欲しい、MS-14は既にジオンのガンダムとまで言われるほど完成している機体である。ここにコンベンションで敗れたMS-15のデータを投入する必要があるだろうか？

[#44]この機体については、完全に筆者のオリジナルである。他所に転載しても間違いと言われるだけなので、注意して欲しい。

[#45]ルナ が開発した機体は、ここで提示した RMS-116、RMS-117 以外に、RMS-114 GEEM（ジーム）、RMS-115 パーザムタイプ、そして後述する RMS-119 EWAC ザックなどが確認されている。いずれの機体も、既存の機体の改修型がメインであり、その基幹システムは連邦系のものである。

逆に言えば、MS-15のいかなるデータを投入することでMS-17という機体が完成するだろうか？
[#46]

この解を求めるには、MS-15という機体のどこがジオン軍にとって画期的だったか、ということを考えればいだろう。実は、MS-15は、(いわばジオン製の)フィールドモーターシステムが部分的にはあるが採用された機体である。このシステムがMS-17には採用されていると考えた方が都合がいいのである。[#47]

つまり、元々は連邦系技術であるフィールドモーターシステムが組み込まれた機体であるMS-17は、ルナ 工廠では既存のシステムラインの応用で生産することが可能な機体だったともいえるのである。

ここからRMS-116を逆に考えてみると、RMS-106の膝関節部の様に、システムチック化した(どちらかと言えばジオン系に近い)間接ではなく、連邦系技術によって建造されているYRMS-106の膝関節部+動力パイプといった構成の方がまとめやすかったのではないかと考えられるのである。

従って、RMS-116はRMS-106のルナ仕様というよりも、YRMS-106をルナにおいて再構成した機体と考えた方が、都合がいいのである。これは、通常同じ機体を強化改良したとした場合、型式は枝番処理することが殆どであり、新規の型式を与えることは希であることから問題が少ないと考えられるためである。(すなわち、RMS-106の改良型であるならば、RMS-106 とい

5. RMS-106CS ハイザックカスタム

RMS-106CSハイザックカスタムは、グリプス戦役終盤に確認されたハイザックのカスタムアップバージョンである。簡単に言えば、性能不足となってきたRMS-106の性能の底上げを図った機体と言えるだろう。

った型式になるのではないだろうか、ということである。)

アナハイム・エレクトロニクスとしてはせっかく採用されたRMS-106と同じような機体を(しかも、自らが設計した機体をベースに)開発されたことについては、気分のいいことではないだろう。しかし、考え方を換えれば、自らが設計したYRMS-106が連邦に受け入れられたということを表しているのである。ということは、アナハイム・エレクトロニクスの開発力が連邦に認められたと言うことであり、やがては連邦のMS需要に食い込めるとことを示しているということでもある。

それ故に、アナハイムとしては、この「ほぼ同型機」の開発については、特に大きなアクションは起こさなかったものと考えられる。[#48]

さらに、同じ機体をそれぞれで開発したことにより、既存のMSの生産設備を利用したMSの開発に関してのノウハウが蓄積されることとなり、結果的には双方にとっていい結果をもたらしたものである。

この様な開発経緯から、RMS-116には、ルナ独自の規格を用いて建造されている部分も存在すると考えられる。これは、腕部パーツの形状違いなどもその理由の一つであるが、最大の理由はRMS-116HとRMS-106でスペックが違う部分が存在するということである。RMS-116HがRMS-106に対して、かなり軽量であること事から、それ以外の部分でもいくつかは改良された部分が存在するのであろうと予測されるのである。

型式から類察出来るように、グラナダタイプのRMS-106の改良型ということになっているが、その基本的なパーツ構成は、何故かYRMS-106に近い部分がある。

しかしながら、この機体には脚部動力パイプ

[#46]これについては、先に示したマスターグレード「ガン」のインストラクションが大きな比重を持つてくることとなる。

ここでの駆動系の解説は、これまでのフィールドモーター説を否定するほどのものではなく、ジオン製フィールドモーターらしき「新機構」が設定されているのである。

[#47]この詳細については、前回の珍説~を参照のこと。

MS-15のフィールドモーター搭載説は、元々は amigo 氏の論説から端を発しているが、現在ではコンセンサスが得られているため、ここでも採用しているのである。

実のところ、このハイザック論が、長い間ペンディングだったのは、この前回の珍説が一段落付くのを待っていたのである(^^ ;

[#48]軍需産業の場合、「いかにシェアを取るか」、ということよりも「いかに軍需に食い込めるか」が重要である場合も多い。

これは、軍用兵器という特殊な商品の場合、自社製品が採用されなくてもライセンスさえ確保できれば生産可能(=売り上げはそれなりに見込める)ことを意味している。

しかし、そのライセンス生産に食い込むためには、実績が必要なのである。そのため、様々な売り込みをかけていくのである。

が存在していないため、この機体がパーツ構成が似ているからと、YRMS-106(あるいはRMS-116)の改修機と決めつけてしまうのは早計であろう。

これは脚部構造(すなわち、動力パイプの有無)に起因することからこのような認識を示したのであるが、この機体が、仮にRMS-116CS^[#49]であったとしたら、筆者は間違いなく「RMS-116CSは、RMS-116の改修機である」という認識を示したと考える。

この場合、RMS-116からRMS-116CSへの改修ポイントは、脚部動力パイプの有無と肩アーマー、胸部コクピットハッチなど、限られた改修ポイントに絞られてくる。さらに、脚部構造も動力パイプが撤廃されたのは、連邦系技術により洗練されたということではないだろうか。

実は、これと同様な機体が存在するのである。それこそが、RMS-108マラサイである。

RMS-108は、一般的にRMS-106の強化発展型といわれ^[#50]ており、RMS-106よりもより連邦系技術によって設計されていると推察されるのである。その理由として、フレーム構造が、RMS-106以上によりムーバブルフレーム的になっていること、ジェネレータ出力がそれほど大きく異なっていないにもかかわらず、ビーム兵器のフルドライブが可能(すなわち、バイパス問題が解決されていると思われる)、基本的な生産ラインがRMS-106から転用可能な点^[#51]、などがあげられる。

このRMS-108では、動力パイプが殆ど存在していない。これは、ムーバブルフレーム的構造が取り入れられていったことで、フィールドモーターをベースとした連邦系システムに機体構造がシフトしていったということであると思われる。

。(蛇足となるが、これを別方向から行ったのが、RMS-099からMSA-003への発展^[#52]と言うことであろう。)

ところが、RMS-106CSは、「RMS-106」の改良型としての型式が与えられている。これは、先に挙げたRMS-116CSという仮定の型式番号とはことなり、改修元の機体がRMS-106であることを指し示しているように受け止められてしまうのである。

RMS-106の改修でRMS-106CSを建造するとした場合、フレーム構造などを含めて、YRMS-106あるいは、RMS-116がパーツとして流用されたのであろうか？

どちらかと言えば、そういった事態は考えにくいだろう。これまでの論説と矛盾しているようであるが、やはりベース機はRMS-116と考えた方がすっきりするのである。

実のところ、この問題を解決可能な資料が存在するのである。先に示したティターンズテストチームの運用記録にその機体が存在しているのである。

RMS-106Cハイザックキャノンが、その機体である。このRMS-106Cは、YRMS-106に中距離砲撃戦用ユニットを装着した機体であり、素直に型式番号を編成するならば、YRMS-106Cあたりが妥当である。しかし、このティターンズテストチームにおけるYRMS-106の装備運用における型式番号は、すべてRMS-106という型式に枝番を付けることで処理されているのである。^[#53]

このことから、RMS-106系であろうが、RMS-116系であろうか、その改修機である運用機はすべてRMS-106という型式に枝番を付けることで対応したのではないかと考えられるのである。

[#49]この型式番号は、あくまで筆者のオリジナルである。(以下、すべて同じ。)

[#50]実際には、様々な資料から純粋にRMS-108がRMS-106の発展型とは言いがたい状態になっている。これは、MIAデータシートなどで触られているように、かなり連邦系技術が盛り込まれた機体としてプランニングされているという事からも、単純に述べることは出来ないだろう。なお、このRMS-108論に関しては、後日別形態で取り扱う予定である。

[#51]厳密には注意が必要。初期納入の6機は外した方がいいだろう。

[#52]MIAデータシートでは、マラサイ(初期納入機)は、RX-81がその基本構造のベースとなっているとされている。

この機体が、さらに量産に適した状態、すなわちRMS-106の生産ラインで生産可能な状態になったのが、後期型のRMS-108だと考えられる。

一方、RMS-099はジオン系技術、特にMS-09S系(おそらくこの段階で、MS-10の技術は投入されているだろう)の技術からの発展であり、実のところ大量生産に向けた機体とは言いがたい。

このRMS-099をより大量生産に向けた機体として設計したのがMSA-003であると考えられるのである。

つまり、RX系技術によって設計された「ザク系」がRMS-108であり、ジオン系技術によって設計された「ジム系」こそがMSA-003であるという解釈なのである。

この2機種種の登場は、連邦系技術とジオン系技術の融合を進めたと言うことであろう。

[#53]ただし、YRMS-106自体も様々な改修が運用時に行われているため、その形状は日々変化していったと行っても過言ではない。

また、一部資料(A.O.Z オフィシャルアートブック Vol.0)には、YRMS-106K表記も見られることから、「制式表記」では、やはりRMS-106 という枝番表記にまとめられたと言うことなのだろう。

このようにまとめると、いわゆる「隠れハイザック」^[#54]が、RMS-116(あるいは、YRMS-106)ベース機であっても問題はないという事になるのである。

また、おもしろいことに「ハイザックカスタム」という機体には、RMS-106S、RMS-106J、RMS-106Cといった複数の型式番号が確認できるのである。この中には、先に挙げたハイザックキャノンのRMS-106Cと重複している型式番号も確認できることもあり、このハイザックカスタムが実際には言葉通りのカスタム機であり、正規のバリエーション機ではないことを表していると考えられるのである。つまり、たまたま確認され、映像記録に残った機体が、いわゆる「隠れハイザック」と呼称された機体ではないのか、ということなのである。従って、RMS-106S、RMS-106Jといったカスタム機が他に存在していた可

能性が高いということなのである。

RMS-106CSは、RMS-106と比較して、細かい部分での改修が行われていることは想像することは容易である。実際、一部資料などでは、ジェネレータ出力などが強化されているという記述も確認できるのだ。しかし、現在確認できるスペックデータの多くは、既存のハイザックとほとんど変わらないデータとなっているのである。これは、先のような型式で確認される「ハイザックカスタム」が、それぞれ異なったスペックであったと想定すると、実にくまなく解決できるのである。

このような認識を行うと、このタイプの機体に与えられた様々な型式番号についても、それを解決する議論が可能になるのではないだろうか。

6. RMS-119 EWACザック

RMS-119 EWACザック(以下機体名は「アイザック」とカタカナ表記する)は、第1次ネオジオン戦争時に初めてその存在が確認された機体である。しかし、資料などが確認されていないだけで、実際にはグリプス戦役期における開発機であることは間違いないだろう。

型式番号に注目してみると、RMS-119という新規ナンバーが与えられている。これは、機体の(事実上の)全面改装に依るものと思われるが、実際には使用されているパーツ構成などを考えると、RGM-79EWと大差ないことがわかる。

なぜ、RGM-79EWでは枝番処理されて、RMS-119では新規ナンバーが与えられたか、という点が、先のRMS-116に通ずるものがあると考えられるのである。

RMS-119もその型式が示すようにルナ 開発機

である。すなわち、ルナ では、既存のMSの改修機にも独自の型式を与えていたと考えるのが無難ではないかと思われるのである。^[#55]

この機体は、高額なEWAC機としては数多く生産されていたようであり、ネオジオン軍に接收され使用されていた例も確認されている。また、EWACユニットは、RMS-106のバックパックと頭部とが一体化した形状であったが、逆に言えば、この部分さえ換装すれば、残りのパーツ類は後付けでも対応が可能という設計であったため、通常RMS-106から換装された機体も少なからず存在していたように想定される。この際の型式番号についてははっきりした資料は存在していないのだが、RMS-119だけではなく、RMS-106EWといった型式であった可能性も否定できないだろう。^[#56]

[#54]実際には、この名称はクワトロの漏らした言葉からの命名であるが、様々な資料に掲載されていることをふまえて、「クワトロが漏らした言葉を百式のデータレコーダーが記録しており、それを元に報告書としてまとめられた」というスタンスをとっている。

その点で言えば、「隠れハイザック」という機体名はエウゴにおける通称であり、正式な機体名ではない。また、実際にこの機体の名称は、単なる「ハイザック(の改修機)」であった可能性の方が高いのである。

[#55]実のところ、この考え方には若干の問題点が存在している。RGM-79EW と RMS-119 の比較にそもそも問題があるのである。前者は、UC0085 頃の旧型式番号時代の機体であり、後者は UC0087 頃の新型式番号の機体なのである。特に、RGM-79EW は作品自体が近年のものであるため機体解説において「RMS-119 と同じタイプの EWAC ユニットを装備している」とまとめやすいのだが、実際には「RGM-79EW で使用されたユニットが RMS-106 に流用された」可能性の方が高いといえるだろう。(そもそも RGM-79EW は、T3 でのテスト機の一つであるわけであるし)本論では、RGM-79EW のユニットを YRMS-106 でテストし、これがルナ にフィードバックされた結果、RMS-119 が誕生した、というスタンスで論説をまとめている。このように考えると、とりあえず RGM-79EW との型式の命名法に差異があってもクリアは可能である。

[#56]つまりは、上記注釈のように解釈するとこういった型式番号も存在していたとしてもななら問題ないということになるのである。

一応補足しておく、この型式番号は完全なオリジナルである。

Sec.4：まとめ

以上のようなことから、RMS-106ハイザックという機体が、いかに複雑な過程によって誕生した機体であるかが判るかと思われる。

地球連邦軍のMSに関しては、このRMS-106以降、いわゆる第2世代MSとして旧ジオン系のMS技術を積極的に採用していくこととなる。だが、グリプス戦役の終結後、これらジオン系MSは、加速度的に姿を消していく ^[#57]のである。最大の理由は、やはり勢力としてのジオン系組織の再来であろう。旧来のジオン系技術をさらに発展させた新たなMS（しかも当時は、MSの発展が奇形化していたため、なおさら特殊な技術を持っていた方が強力なMSを開発することが可能だった）が敵勢力として現れたということは、旧来の技術を取り込んでいくだけでは敵のMSに性能的に対処できないIMSを開発しているに過ぎない状態であったのである。

さらに追い打ちをかけるような事態が起きる。簡単に言えば、ティターンズの敗北である。これにより、連邦系技術の独自発展というティターンズが推し進めていたMS開発も頓挫することになったのである。 ^[#58]

ティターンズとは元々ジオン残党狩りに特化した部隊である。グリプス戦役時には、その上層部の暴走により、組織として本末転倒な行動を繰り返したが、その構成員には純粋に「ティターンズという組織」の持つ役割に誇りをもって戦っていた兵士も多い ^[#59]のである。ティターンズは、地球連邦軍の多くの部隊から冷ややかな態度を取られることが多かった。これは、ティターンズという部隊の優位性（階級を一つ上として扱われるなど）に対するやっかみのようなものが殆どではあったろうが、中にはティターンズ上層部の振る舞いに対して危険な感じを抱いていた人間も多かったということだろう。

仮に上層部が本来の意味での残党狩り、すなわち、旧ジオン軍残党のテロリズムに対する活動だけの部隊運用だけを行っていたとしたら、ここまでティターンズに対する感情は悪くなっていなかったとは考えられる。 ^[#60]

地球連邦軍の腐敗については、既に一年戦争直後（一年戦争中といっても問題は無いと思われる）から取りざたされていたが、グリプス戦役後に政権中枢に収まった旧エウーゴ系、あるいは日和見をしていた将官は、一言で言えば官僚主義であり、スペースノイドにとってみればグリプス戦役前後でなんらかかわるところは無かったのである。 ^[#61]グリプス戦役は、結果的に反ティターンズ派の一部将官により利用された内戦に過ぎないものとなってしまったのである ^[#62]。

この結果、ティターンズに虐げられていたアナハイム・エレクトロニクスは、事実上連邦政府の一

[#57]一応、この最大の理由は作品展開上の制約のせいではあるが、これをふまえた上で論説化したのが本文中の解釈である。

[#58]ただし、グリプス戦役後半では、ティターンズのMS開発は一貫性のないものになっている。これは、劣勢に追い込まれたと言うことと、ジュピトリス陣営の参加が理由にあると思われる。あえて言うならば、RMS-154パーザムが本来の考え方に回帰しているということなのだろう。

[#59]具体例を挙げれば、アジス・アベバやエアリアルド・ハンターなどはこういった兵士にあたるだろう。というよりも、本来、ティターンズはこういった兵士が多かったものと思われるのである。どちらかといえば、ジャミトフ・ハイマン派の暴走により、それら兵士は無駄な戦いに駆り出されたといっても過言ではないだろう。

[#60]とはいえ、ティターンズは、設立当初から強権的な活動を行っていたことは間違いない。しかし、ティターンズ内部でも（言葉は異なるのだが）、ジャミトフ親衛隊ともいえる部隊と、それ以外の部隊では情報管理や運用面で大きく差が付いていたことも事実である。（でなければ、AOZのようなストーリーは成立しない。）

[#61]実際、グリプス戦役の終結後、エウーゴも自然消滅的に瓦解している。「反連邦（ティターンズ）」という名目だけで集まっていた旧ジオン系と反ティターンズ系連邦組織がそれぞれで勝手に動き始め、事実上の瓦解となったのである。

[#62]もちろん、ブレックス准将が存命だった場合は話は変わっていたと思われる。少なくとも彼の理想は、第1次ネオジオン戦争時の連邦軍とは異なっていただろう。結果的に、ブレックス准将の死が、シャアを表舞台に立たせることとなったが、それ故に自らの地位がためを行おうとした「腹黒い政治家（＝連邦将官）」たちによってシャアが利用されただけに過ぎない状況を作り出してしまった。こう考えると、シャアが姿を隠した理由もわかるが、逆に言えばシャアが前面に立って活動しつづけていた場合、連邦政府自体が変わっていた可能性も否定できない。

角に(むろん表だった形ではないだろうが)食い込むことができ、以後の蜜月関係を生み出したと思われる。これにより、連邦軍のMSは事実上アナハイムの寡占状態となってしまう、「アナハイムに都合のいい機体」が、連邦系のMSの中核に座っていくことになるのである。

さて、ここでアナハイムに都合のいい機体、というのがどのようなMSであるかを少々考えてみたい。先にYRMS-106というアナハイム製の機体を紹介している。その後も、RMS-108などの機体をアナハイムは生産しているのだが、実のところ純粋にジオン系に近い機体というのは、RMS-106(とRMS-099)だけといっても過言ではないのである。

少々脱線するが、ジオニック社の施設設備を吸収したアナハイムが、ジオン系MSの生産をそれほど行っていないと言う点に驚く方も多いだろう。しかし、精査していくとそういった方が実情にあっているのである。もちろん、「ジオン系技術」を使用していないという事ではない。むしろジオン系技術は積極的に利用しているのは間違いないのである。異なっているのは、ジオン系技術と連邦系技術の積極的な融合を計っているということなのである。例えば、RMS-108マラサイは、そのベースとなった技術はRX-81系のものである。ジオン系MSではなく、連邦系MSであるRX-81系の技術を持ち込み、ジオン系MSの技術によって生産を行った機体というのが、RMS-108といえるだろう^[#63]。

RMS-099リックディアスは、その設計ベースにMS-09S(あるいはMS-10)があるが、RX-78GP02Aのデータも多分に投入されていることは間違いないと近年では考えられている。さらに、この機体を発展させていった機体には、積極的に連邦系技術が用いられており、MSA-003ネモにおいて(ジオン系技術から発展してきたとはいえ)事実上連邦標準のジム系MSまで生産するに至っているのである。これにはティターンズから奪取したRX-178のムーバブルフレームのもたらした功績が大きいことは間違いないだろう。

一方、MSZ-006をはじめとするエース機は、双方の技術をふんだんに盛り込んだ高性能機として仕上がっている。双方の技術の最も優れた部分を融合させるということが、当時の「最強のMS」を開発するには最も手っ取り早い方法であることは簡単に想像できるだろう。それ故にこういったエース機にはふんだんな技術投入が行われているのである。とはいえ、その後投入されたMSZ-010、MSA-0011のようにベースとなる技術は連邦系が基準となって開発が進められているのは、やはり連邦系MSがアナハイム・エレクトロニクスにとって都合のいい機体ということになるのである。

こうしてみると、アナハイムが提供したMSというのは、大量生産の可能なMSと非常に高額なほとんどワンメイクに近い機体であるということが判る。

これから考えると、アナハイムにとって都合のいいMSというのは、廉価でコストパフォーマンスのいい機体と高価格で金を落としてくれる機体、ということになる。

後者はともかく、前者ではその利幅が少ないことは容易に想定できる。では、前者のようなMSで利益を上げるにはどうしたらいいだろうか。

答えは簡単であろう。製造コストを極力切り詰めるのである。そのためには、まず第一に大量生産に向けた仕様でなければならない。また、これからの仕様変更に対して柔軟に対応できる機体でなければならないのである。また、メンテナンスなどで稼ぐにせよ、基準となるMSが受け入れられなければそういった利幅の大きな分野で稼ぐことは不可能であり、それだけに基本となる機体が如何に受け入れられるか、ということに大きなウェイトが置かれることは理解していただけたと思う。

ここまでくるとある程度理解してもらえらるだろう。ジオン系MSは、確かに優れた機体が多かった。MS-14は、連邦のRX-78に匹敵する性能を量産機レベルで実現していたし、MS-06はRGM-79をはるかに上回る量産を成し遂げている。だが、MS-06はその発展性に限界がきており、この機体をベースに新型機を開発するのは事実上不可能(RMS-106が如実にそれを表しているが、それ以前からRタイプの開発の難航など、MS-06ベースで新型機を開発することが難しいことは実証されている)であること、MS-14は機体スペックは優れているが発展性に乏しい^[#64]上、量産性にも疑問が残る(確かに量産自体はたやすいかも知れないが、戦後の既存ラインでどこまで対応できるかという点では疑問点が残る)こと、そして何よりも連邦が元々持っているノウハウ(この場合、運用施設やそれに類するものもすべて含める)をすべてジオン系に切り替えることは不可能である点から、ベースとなるのはどう考えてもRGM-79系になってしまうのである。

[#63]ただし、これについて確定しているのは初期の6機のみである。

しかし、後に納入された後期型が、これらの設計を踏襲していないはずはなく、設計はRX-81系の技術でありながら、よりハイザックと共用になったのがRMS-108の後期型という解釈でいいだろう。(これについては、珍説9で筆者なりの解答を提示している。)

[#64]これはMS-17が開発されたことから明らかだろう。

実際、アナハイムもRMS-099からのジオン系MSの流れが色濃く残るMSA-003からRGM-86へと早々と切り替えておりこの点からも、連邦系MSが大量生産に向いていることが判るだろう。

この流れは、続くRGM-89で結実し、この機体はバージョンアップを繰り返しながら30年余りも使用される名機となるのである。もちろん、様々な改修は続いていたわけだが、基本的な設計とパーツ群が踏襲されていることから、(自動車におけるマイナーチェンジのごとく)比較的成本をかけずに更新することも可能だったのである。実際、この流れは続くRGM-109にも取り入れられており、サイズダウンしただけで基本設計はRGM-89と何ら変わるところはなかったと言われている。すなわち、このRGM-109系まで含めると、RGM-89は60年余りにわたって運用された希有な機体と言うことになるのである。

このように考えると、RMS-106が歴史の流れに消えていったのはある種の必然とも言える。しかしながら、本機がトライした連邦系MS技術とジオン系MS技術の融合は、後々に渡って非常に意義のある技術を生み出したとも言えるのである。ただ、残念なことにこの技術革新が確実なものとなったのは皮肉にも「敵対していたエゥーゴの開発したMSであった^[#65]」という点が、RMS-106の評価にとってマイナスが目立つ結果をもたらしているのかも知れない。

[#65]意外と思われるかも知れないが、この技術融合が確立したのは間違いなくMSA-003である。

MSZ-006などを持ち出す動きがあるかも知れないが、こういったハイスpek機は、ある意味コストをかけるため、こういった技術投入が行われるのは当たり前とも言える。

これが量産可能な技術として定着したときが、本当の意味での技術革新だろう。

巻末コラム：MSの世代分け

MSの世代表記については、様々な表記方法が混在し、非常にややこしいことになっているのが現状である。例えば、現在展開中のパートワーク「ガンダムファクトファイル」の世代分けは、明らかに既存の考え方とは一線を画している。(詳細は、実際に購入して読んでいただくのがいいだろう。これに関しては、抜粋することで意味が曖昧になってしまうことは避けたいと考えている。)

筆者は、リアルタイムで機動戦士ガンダム～以下ファースト～を見てきた世代であり、MSVの直撃世代のため、続く機動戦士ガンダムにもかなり思い入れが強く、当時の資料からいくつかまとめたデータも存在している。

この当時の資料(というか、ガンダム放映時～終了直後の資料)では、グリプス戦役期におけるMSの世代表記は、第2世代MSと第3世代MSまで、であったのである。

つまり、混乱に拍車をかけたのは機動戦士ガンダム 以降という事になるのだ。

ガンダム当時のMSの世代表記は以下ようになる。

- ・第1世代
一年戦争当時のMS
- ・第2世代
全周モニターとリニアシート、ムーバブルフレームを採用した機体
- ・第3世代
可変MS

どうだろうか、ご覧になって判るよう様に非常にシンプルなのである。当時の資料には、ハイザックは戦後第2世代MSの初号機であり、ジムを第2世代MSに改修したジムと共に連邦の戦力を支えていた、とされており、これら機体がエウゴの繰り出してきた新型であるリックディアスにはかなわなかった事から、新型MSが投入されるようになったという扱いだっただけである。リックディアスが連邦の第2世代と一線を画すもの、それこそがガンダリウムだったということなのである。

しかし、そのリックディアスも既存のMSから発展してきた第2世代MSであり、ティターンズが新たな発想で開発した「人間に近い」可動領域

を持つムーバブルフレームを内装したガンダムMk-には、運動性能などで劣ること、そして何よりも象徴としてのガンダムを欲していたため、エウゴのガンダム強奪事件が起こった、というのがガンダム初期に登場したMSの関係であったわけである。

現在の解釈とは異なる部分もあることがわかると思うが、重要なのは、すべて第2世代MSであったということなのである。

現在、第2世代MSの定義に「ガンダリウム合金」の採用を加えている定義もある。しかし、筆者としてはこれには疑問点が多いのである。むしろ、「定義の一つ」として加える分にはかまわないが、これを定義に加えると、少なくともガンダムMk-は第2世代MSでは無くなってしまふ。また、UC0087/7以降装甲材も換装されガンダリウム合金製となっており、この時点で第2世代MSと表記されると非常にややこしいことになってしまうのである。

また、この定義だともう一つややこしい機体が登場してしまうのである。「アッシマー」である。これは、後述することとしよう。

脱線したが、話を進めよう。

ガンダムでは、ガンダムに対する世代分けを行うため(新型機であるため、新世代MSという看板を付けようと思ったのでは無かろうか?)か、第4世代MSという表現が用いられている。この第4世代以降、混乱に拍車がかかるのである。

第4世代MSの定義として「分離合体式MS」という定義が一部資料で見ることが出来る。これこそが、ガンダムを表すために用意されたカテゴリである。だが、作品を(あるいは、その当時のMS全体と考えてもいい)振り返ってみると、分離合体式MSというのは、ガンダム、パウ、Sガンダム程度しか存在しないのである。(それこそ、Sガンダムは番組終了後の機体であり、当時は存在していない。)さらに、ドーベンウルフ、ゲーマルクなど既存のMSの枠をはみ出したMSが登場したのもガンダムという番組の特徴であり、これらの世代分けがなされないまま番組が終わろうとしていた。

筆者の記憶が曖昧で申し訳ないの

だが、ちょうどその頃に第4世代MSを「高出力型(高機能型)MS」と定義する資料が登場したように記憶している。確かにガンダムを含め、当時のMSはそれまでの第2～3世代MSのスペックを大きく凌駕する高出力型ジェネレータを搭載した機体が多く、これらを第4世代MSと分類するに、抵抗は無かったのである。(これに関連して、パウは第3世代、という分類になったが特に引っかかりを感じなかった。)

続く、逆襲のシャアでは、やはりガンダムを分類するためか第5世代MSという分類法が登場する。この分類法については、当初から「特殊な分類」という認識があり、筆者としては、特に認識として問題となつたようには記憶していない。

すなわち、第5世代MSとは「サイコミュ(あるいはサイコフレーム)搭載型MS」という分類である。

発表当初の世代分けは、上記のようなものであったが、時代の変遷と共に機体そのものの設定が変更されてくると共に、世代分けの概念も変わってくることとなった。これに対して、ある意味頭の固い、筆者などはどうしても違和感を感じてしまうということなのである(^_^;))

最後に、筆者が今現在考える世代分けについてまとめて、このコラムを終わりたいと思う。

- ・第1世代MS
一年戦争時のMS。大きく2系統に分けられ、連邦系セモノコック装甲採用タイプとジオン系モノコック装甲採用タイプの2種がある。

- ・第2世代MS
一年戦争後に新設計されたMSで、全周モニターとリニアシートの採用が行われた機体。また、ムーバブルフレームが部分的、あるいはフルスケールで採用されていることが条件である。

量産型MSとしての初号機はハイザックであり、試作機としての初号機はステイメンである?

- ・第3世代MS
一年戦争後に開発されたMSで、第2世代MSと同様の条件として、全周

モニター、リニアシートの採用、ならびにムーバブルフレームの部分的あるいはフルスケール採用が行われ、なおかつ可変MS（あるいは可変MA）として完成している機体。

初号機は、アッシマー（と思われる）であり、少量生産された機体は存在するが、本格量産された機体はガザC、ガザDのみである。

・第4世代MS

高出力・高機能型MSとして開発されたMS。基本的な機体構成は、第2世代MS以降の構成であるが、非常に高出力なジェネレータを搭載している、あるいは、非常に斬新な新機軸を搭載しており、既存のMSとは大きく一線を画す機体となっている。

ガンダムやドーベンウルフなどある意味恐竜的進化の果てに袋小路に陥ったMSがカテゴライズされる。

・第5世代MS

基本は第2世代MSであるが、ニュータイプ対応デバイス（サイコフレーム）が搭載された、いわばワンメイクのハイスペック機。

このカテゴリの機体も、進化レベルで言えば袋小路に陥っているが、その技術の殆どは、続く小型MSへと活かされている。

筆者が考える世代分けは、上記のようなものである。これに以下の内容を追加しておきたい。

これは、現在主流となっているMSの定義を受け入れるための考え方である。

・第1.5世代

第1世代MSと第2世代MSの移行期に誕生したMSのカテゴリ。第2世代、第3世代にカテゴライズされるMSにも厳密に言えば、こちらに分類される機体も多い。

定義は、「ムーバブルフレームの部分的採用」。これは、0083以降に区分が変わったような機体群をカテゴライズするためのものとも言える定義で、ムーバブルフレーム以前の設計と現在ではされることの多くなった、ハイザック、リックディアス、ジムなどのガンダム初期の機体や、ステイメンなどの少々区分の難しい機体、ゼフィランサスやガーベラなどの第1世代MS以上第2世代MS未満といったMSをまとめ上げるのに便利であるため、個人的に用いている。

先述したアッシマーも実は、この分類だと都合がいいのである。

アッシマーは、脚部構成が第1世代MSに近いスラスト内蔵型であり、変形機構も機体の装甲パーツにMAモードの機体構成を行わせるなど、旧来の設計に近い部分もある。しかしながら、これを第1世代MSと分類することは難しく、しかも現在の分類だと、第3世代とするわけにもいかないのである。

そういったことからこの1.5世代という考え方は意義があるだろう。

蛇足ながら、UC0120年代以降の小型MSは、第2期MS群として分類されるが、これも厳密には世代分けを行った方がいいと思われる。

しかし、この時代以降は、作品そのものが少ない上、作品ごとにMSの傾向が異なるため分類作業そのものが行われていないのである。

以下は、筆者が考えている分類であり、一切他の資料などでは見ることの出来ないものであることを先に断っておきたい。

・第2期第1世代MS

既存の第1期世代MSから発展した機体。（ヘビーガン、F71など）

・第2期第2世代MS

第5世代MSなどで培われた技術を投入され、新世代MSとして誕生した機体。ビームシールドなど比較的高出力なビーム兵器を運用可能。（F91やクロスボーン系MSなど）

・第2期第3世代MS

ミノフスキーデバイス（ミノフスキーフライト、ドライブなど）を搭載したMS。多機能型が多い。（ザンスカール製MSやリガミリティア製MSなど。原点回帰したG-SAVIOR登場MSも含む。）

・第2期第4世代MS

第3世代MSからの発展型であるが、連邦の新型機動兵器開発によって誕生したMM（マンマシーン）のこと。メタトロン側のガイア・ギアもとりあえずは含む。

とりあえず、「こういった分類で見えてはどうか」といった程度のもではあるが、貴兄の考察ネタの参考になれば幸いである。

参考・資料一覧

大まかな分類です

- ・MS大全集98/2003/2006
- ・EBシリーズ(復刻版含む)
- ・データコレクション
- ・GUNDAM OFFICIALS
- ・アナハイムジャーナル
- ・グレートメカニック
- ・月刊OUT
- ・その他目についてものを取りあえず(^^;)

実は、MGハイザックのインストラクションが行方不明のため、これを一切勘案しない内容となっています。大きく破綻するような内容はなかったと記憶していますが、これが発見できたときには、再びアレンジする可能性は否定しません。

SPECIAL THANKS (順不同)

皆さんの掲示板での投稿や意見などが作成に大きな力を与えてくださいました。

- ・一文字突破さん
- ・カセクスさん
- ・だっちゃんさん
- ・BASARAさん

参考

サイト内における他の考察については、以下のものが現在閲覧可能です。機会がありましたら、他のものもごらんになってください。

- ・アクシズナンバーの謎?
- ・シャイニングフィンガー
- ・百式の開発における謎?
- ・2種類のFD-03が存在?
- ・ガザDの色はピンクか?
- ・珍説RX-78論
- ・ペガサス級ハルナンバー
- ・異端のMS群~ジオニックの陰に隠れたMSメーカー

更新履歴

- ・H17/5/17: Rev.1.00公開 / ユーザー公開
- ・H17/5/22: Rev.1.01公開 / 誤植修正
- ・H17/5/25: Rev.1.11公開 / Wiki公開用バージョン
- ・H17/5/29: Rev.1.51公開 / 印刷対応の微修正及び文章表現の修正
正式公開に伴う、PDFファイルへの編集制限追加
- ・H17/5/30: Rev.1.71公開 / 大ミスを修正、コラムの追加

Rev.1.71をもってとりあえずの完成とします。
その後の改訂については未定です。

最後に

ご一読ありがとうございました。
限定公開!実験場の管理人、あさぎりです。

枕で語りましたが、この本は今までのサイトでの考察展開とは異なった方法で提示しています。
最大の理由がやはり前回同様、分量が半端ではなくなった、ということだったりします(苦笑)
(なぜPDFにしたかについては、枕で語ったレベルのものしかありません。詳細が知りたい方は、前回のファイルの後書きをご覧ください。)

今回のファイル作成における目標の一つが、GUNDAM OFFICIALS的な高密度文書として仕上げてみるというものでした。現在投入しているWikiのハイザックの解説は、非常にシンプルなものですが、これをOFFICIALS的な文章にブラッシュアップしてみようという考え方があったのです。(ただし、これをWikiにそのまま投入するということは無いかと思います。)

最終的に、OFFICIALSにはかなわないまでもそれに匹敵するような文章にまとめられたら意図したところは成功だったのではないかな、と考えています。(何せ、筆者はバリバリの理系人間なので、文章的におかしな所も多々あるかと^^;)

また、今回は前回PDFの制作において手探りであった部分を、様々に変更しています。いずれもまだトライ&エラーの域を抜け出せませんが、メインで使用している一太郎2006のDTPモードの機能を様々テストしているといった段階です。(故に今回は、機能としての「脚注」を使ってみました。)

とにかくワープロで凝った文章(HTMLで普通にできない縦倍角や横倍角、行途中のイラスト挿入など)を行っても、それがそのままファイルになるというのは、なかなかおもしろい物です。

前回の後書きでも触れていますが、同人誌活動を行っていた頃の楽しさを思い出しながら「ああでもない、こうでもない」とまとめてみました。

様々なご意見等ありましたら再び文書内をいじり倒してみたいと考えていますので、積極的にご意見は下さい。

次回がありましたら、色々な人に参加してもらいたいと考えてます。あなたもどうですか?(笑)

奥 付

発行日：平成 18 年 5 月 30 日発行 Rev.1.71

発 行：限定公開!実験場
(<http://www.synapse.ne.jp/mist-a/>)

編 集：あさぎり

注意

本書の内容は、独自解釈に基づく物であり、すべてが機動戦士ガンダムシリーズにおける公式な物ではありません。

本書の内容の無断転載を禁じます。
転載希望等ありましたら、上記サイト内掲示板へその旨連絡をお願いします。よほどのことがない限り、拒絶することはないかと思えます。
内容に関する質問等も同じ掲示板をお願いします。